

日本古典詩歌からの文化教育

– 『万葉集』のコンテンツ化を通して

河 晶 淑*

(e-mail: fervour@hanmail.net)

【Abstract】

A cultural education was a term that there was no acquaintance in an educational history yet, it appeared as a critical countermeasure to inclined education of an existing knowledge transmission center after the chiefly 1990's though. It doesn't limit to specific study and the subject, openness of an educational content and the learner's active participation are done chiefly, and the spread power of a cultural education to show the concern to various phenomena of the culture is extremely large now. The Japanese poem of Japan has a Japanese sensibility. It is a Japanese cultural product. Therefore, it seems that it is not possible to remove from a cultural education. Then, how should be passed on to learners in South Korea the culture of the Japanese poem? It has a Japanese element, and a South Korean and an intimate element are collected. It seems that it is a text no the most much agreement of 'Manyoshu'. It is necessary to develop the cultural contents thing that popular sympathy can be done by making the best use of the original.

key words : "Manyoshu", Cultural education, Contents, Storytelling,
Karakoromo(韓衣), Omo(母)

* 新羅大学、招聘教授、日本上代文学

1. はじめに

21世紀という新しい世紀に踏み込んだ今日、もはや過去のモンロー主義みたいな態度はどここの国でも取れにくくなり、世界中、すべての国が友好的な関係を結び、相互間の文化や生活を尊重しながら豊かな明日を志向するような時代になったのである。韓国もそういう時代の波に乗り、大学だけではなく、高校、中学課程からも第二外国語が学習できるようにしている。

今までの言語教育は、意志疎通の能力が重要視され、実用性中心の教授・学習の方法が使われていた。ところが、最近の外国語教育の場合、単なる意志疎通の能力以外にも該当国家の文化に関して理解できる能力なども必要だという観点が強調されている。すなわち、外国語を話す、聞く、書く、読むことだけでなく、目標言語の文化が分かれば外国語駆使に有用であるということになる。

では、なぜ文化の理解が必要であろうか。意志疎通の能力に関して言及したHymesは意志疎通の能力の構成要素として、話し手と聞き手の言語構造的、心理言語的、社会文化的理解、そしてその言葉が通用できるかどうかということに関しての知識と使用能力が総合され、意志疎通の能力になると定義した。彼は社会言語学的な面での知識、すなわち意志疎通の能力が重要であることを強調しながら文法規則だけで言語の学習を成し遂げることは不可能であることを指摘している。¹⁾

古典文学には、その国だけの特質がある。その特質というものはその国の人々が生きてきた姿、すなわち文化である。このような古典文学が最近韓国国内での人文学の崩壊と共に学問として軽視されている。ところが、学問としては軽視されていても教養としての古典文学はコンテンツ化され、商業的にも、文化教育にも、外国に自国を知らせる時など、多様な分野で利用されていることも事実である。

日本の古典文学、その中でも和歌はきわめて日本的な感性を持っているということで、文化教育から外せないと思われる。では、その和歌という文化を韓国の学習者たちにどういふふうには伝えれば良いのか。日本的な要素は言うまでもなく、韓国人にも親密な要素も収録されている『万葉集』の中のいくつかの作品を例として述べていきたい。

2. 文化教育の一環として古典詩歌導入の必要性

韓国の日本語教育は1910（明治43）年まで遡ることができる。日本の朝鮮統治時代である。そこで、国語教育と称する日本語教育が実施されたが、その際使用された教材

1) Hymes D 'On communicative Competence' Sociolinguistics, England Penguin, 1972

の姿が、昨今の研究によって明らかになってきている。日本統治下の朝鮮における教科書は、計5回の改訂があったことがすでに検証されており、上田崇仁氏『植民地朝鮮における言語政策と「国語」普及に関する研究』によると、第5期（1941年～）の教科書に、「御民われ」「万葉集」というタイトルで『万葉集』の歌が教科書に採録されている。第5期の教科書というのは、日本の国民学校で使用されていた国定教科書がそのまま使われていた時期である。この第5期は敗戦の色が濃くなり、政策的に強化された時期でもある。従って教育というより、一方的に日本語の学習を強要されていた時期である。

ところが日本の敗戦後、1960年代になるまで日本語の教育は勿論、大学の日本語関係の学科も殆ど存在していなかった。即ち1961年、韓国外国語大学で初めて日本語教育が実施され、1962年西京大学(前国際大学夜間)、1965年の韓国国交正常化を経て、1972年私設学院15箇所を認可、1972年から海外留学生選抜試験に日本語が含まれることになる。1973年教育部により人文系高等学校で第2外国語科目として日本語教育が始まり、1973年12月、全国の5つの大学で日本語関連学科が設置される。1985年49箇所と急成長し、1990年代に入って教養科目として日本語の講義が選択できるようになる。1993年10個の大学で、分校を含め123箇所日本語の教育を実施、2000年代に入るとは全国約200箇所の大学（専門大学を含める）で日本語の教育を実施するようになった。ただし、最近では全国約105学科と減り、日本の状況や韓日関係の問題、中国の飛躍的な発展などで日本語の学習者は減っている一方である。

最近の中国の韓国語教育は文化教育から、すなわち韓国人の独特な行動様式、大衆文化、文学作品などを活用し、韓国文化への親密感を造成させてからの言語活動を考案している。²⁾

どの単語にも簡単に付けられるし、どんな社会、どんな関係でもすぐに形成されてしまう文化という言葉は、その概念の整理はそれほど簡単ではない。あまりにも包括的、広範囲であるし、どんな目的と接近方法を持つかによって文化の定義は変わる。一番伝統的で包括的な定義として認められている文化人類学者E.B.Tylorの見解を引用していえば次のようである。知識、信仰、芸術、道徳、法律、慣習、そして社会構成員によって人間として獲得した全ての能力や習慣を含めた複合的なものの総体が文化であるという。したがって人間生活の全てを文化と言っても過言ではない。

文化の初期形成は言語を排除して成し遂げられるとしても、その伝達と継承には言語が必須的の要件として作用される。同じ文化を共有する社会構成員たちは、同一の文化的環境で形成された言語で新しい文化を創造し、継承しながら共同社会を維持しているためである。

文学はその言語を表現手段にした各国の代表的な芸術であり、また、それぞれの国の

2) イ・グンピョ 「中国の韓国語教育と我らの外国語教育」『教育マダン』巻二、2003

持つ多様な背景の理解にも役に立つ。勿論、いかなる国の文学でも、特に古典文学は、外国人には理解されにくく、翻訳されれば別のもになってしまうこともある。それでも言語が人間の生活から生まれたものである以上、その意味するものは根本において共通性を持っているはずであるので、すぐれた古今の名著は時代と国境を越えて愛読されていると思われる。

韓国の日本理解も、日本の韓国理解もお互いにそのような文学からの接近法より始めたらどうだろう。両国とも、特に最近韓国では日本文化、日本学が盛んでいる。ところが、それは現在の日本の表面的なところだけで、その根までは至っていない。現在の日本が存在するための背景、その背景まで解らない状態では、真の日本を受け取ることには限界があるだろう。

韓国の教育部（日本の文部科学省に当たる）の第7次教育課程にある日本語科の教育目標には

第6次教育課程からは意志疎通の能力を中心とした、実用性を重視した日本語教育を志向しているし、第7次教育課程でも文化の理解と状況に合う言語使用能力の伸長をより強調している。…（中略）…特に日本語を学習することにおいて過去不幸だった韓・日関係史による学習者の葛藤は他の言語からは見当たらないもので、学習効果に大きな支障をもたらし、今後の韓・日関係の定立においても重要な要因として作用するところである。したがって、高校の日本語教育では、意志疎通のための言語機能教育だけに留まらず、日本語学習に興味を持たせ、日本に対しての客観的な理解と正しい日本観を持たせる態度教育にも力を注ぐべきである。³⁾

とあり、「言語材料」のところに「文化」という項目を別に提示している。

ところが韓国で実際使われている日本語Ⅰの12種類の教科書に反映されている文化の素材は「地理と気候」「衣食住文化」「観光地と遺跡」「交通文化」「貨幣」「言語礼儀」「習慣と慣習」「学生生活」「余暇生活」「大衆スポーツ」「伝統芸術」「年中行事」「宗教と文化」などで、文学、特に古典文学に関しての言及はないということが分かる。⁴⁾日本語Ⅱの教科書には何種類かあるが、大学への入試準備のため、実際教育現場で日本語Ⅱを教えている学校はほとんどない。したがって今の韓国の日本語の学習者には、日本の古典文学を通して、これまで蓄積された日本人の情緒を自然に受けとる道は全無であると言えるだろう。

3) 1997年12月30日告示。後2004年改定、2005年改定、2006年改定、2007年改定、2009年改定、2011年改定を経たが、第二外国語は改定無し。

4) オ・セウォン「韓国高等学校の教科書に反映された日本文化教育の現況」全南大学教育大学院修士学位論文、2003

学生たちの文学的ジャンルに関しての一般的な発達過程をみると、最初は寓話が好きになり、だんだん物語り、民話、小説、詩の順に発展していくそうだ。オ・ヨンスク氏によると韓国の中学課程の国語の古典作品の構成はこの学習段階を考慮していないが、日本は学習指導の要領に従い、1年生は物語を、2年生は随筆を、3年生は詩を学習するという段階になっているそうだ。氏による面白い資料があるが、韓・日の説話、西洋の説話を出し、韓国の中学生たちを相手にアンケート調査をしてみると、学生の4/5以上が韓国の説話より西洋の説話の方をよく知っていて、日本の説話を学ぶことについては否定的だった。その理由として主にあげられていたのが「我々とはなんか違う」「日本の古典を読むということとはなんか抗日精神に逆らっているようで」「理由もなく嫌い」であった。⁵⁾結局、韓国の学生たちに第二外国語として一番多く選択されている日本語は、実用的な側面（入試など）での受容だけで、真の理解、真に学びたいというところは不足しているということが分かる。これは第7次教育課程の目標にも反する。

散文がこういう状況であるなら、韻文はいうまでもないだろう。韓国国内の中等教育現場での日本の韻文教育の状況についての資料は皆無であった。特に古典詩歌は韓国でも代表的な言語芸術ではあるものの、中世的形式美と関連された模範を志向する性向が強いため、現代人の間で積極的な共感や親近感などを引き起こすことは難しくなっている。⁶⁾

ところが日本は韓国と違う。毎年行われている俳句及び和歌、狂歌、川柳大会からも分かるように日本を表す様々な文学ジャンルの中でも短歌は特別な意味を持っていると思われる。石川啄木氏は「歌という詩形を持っていることは我々日本人の少ししか持たない幸福のうちの一つだ」と言っているが、逆に言えばそれはきわめて日本的な感性を持っているということであろう。

古典は、我が国の言語文化の代表的産物であり、現時の文化を根底から支える存在である。そして、何よりも、人間の生の証が脈々と流れ続けてき、また、将来にも流れ続けていくことが約束されているものなのである。…（中略）古典を学習する価値は、国民の財産であるからというのではなく、むしろ、人間の生き様に出会えるということにあるのである。…（中略）国際社会の中の日本文化の歴史・伝統・個性等について、それぞれの文化のもつ特殊性とその底を流れる共通性、普遍性を正しく認識して行動できるよう、しっかりとした日本人としての文化的素養・能力を身に付けることを必要とする。⁷⁾

この古典の指導の狙いは、概して外国人の学生にも適用されると思われる。要するに日本人にはしっかりとした日本人のが涵養が狙いであれば、外国人にはしっかりとした日本を

5) オ・ヨンスク、韓・日古典文学教育の比較研究、順天大学教育大学院修士学位論文、2005

6) クォン・ジョンウン、「文化教育と古典詩歌の脈絡的情報」、『新国語教育』79号

7) 鈴木二千六、『古典教育の史的展開』1994. 12

知るための古典文学である。自分をしっかり持ちつつも、相手を知って尊敬すること。これが人と交流する上で一番大事なことであろう。国家間の理解関係はもっと複雑であるが、似たものであろうと思われる。先の引用文にあるように、まず自国のことを知るためにも、また外国人が日本のことをわかるためにも逆にカノン化された古典も必要ではないかと思われる。

90年代半ば以後から猛スピードで発展しているIT産業は、情報通信の発達をもたらし、それによって多様な媒体が誕生した。このような情報通信の発達と多様な媒体の出現で大衆は文化コンテンツという新しい文化産業を享有するようになった。すなわち選択の幅が広くなり、大衆は自分のニーズに合う文化コンテンツを探し、楽しもうとしている。

このような時代に外国語を、さらにその語の古典文学を教えている研究者たちが教育現場でぶつかっている問題点は様々であろう。自国の古典文学にでも興味を失いつつある人々に他国の古典文学を教えることは容易ではない。

ところが、上で述べたように韓国の人々は、韓国の説話より西洋の説話の方をよく知っている。

それはなぜなのか。勿論教育の方法にも問題があるだろうが、それこそ文化コンテンツの影響を表しているのだと思われる。「人魚」といったら韓国の人々はアンデルセンの『人魚姫』及びディズニーでアニメ化された『ザ・リトルマーメイド』、映画『Splash』など様々なコンテンツを持っている西洋の「美しい人魚」を思い出すことはできるが、中国の『山海経』のはげおじさんの姿の「氏人国」の「人魚」、韓国の「浪奸」、韓国の「浪奸」と似た構造を持っている日本の「八百比丘尼」は殆んど知らない。それは東洋の「人魚」に関しての文化コンテンツが殆んどないからではなかろうか。

文化コンテンツ (Culture Content) とは、創意力と想像力を源泉に、文化的な要素、そして技術 (CT) が加えられ経済的価値を創出する文化商品を意味する。文化コンテンツを創作するに源泉になる文化的要素には、生活様式、伝統文化、芸術、物語り、大衆文化、神話、個人の経験、歴史記録など多様な要素が含まれている。またその分野はキャラクタ、漫画、アニメーション、ゲーム、モバイル、エデュテインメント (Edutainment)、映画、ビデオ、放送、音楽、公演などとなっている。

従って、文化コンテンツは「大衆性 (普遍性)」と「創意性」、そして「媒体」の三つの要素を主軸とする文化的産物である。「大衆性」は階層別に共有する文化的普遍性を意味する。「創意性」は、いままでとは違うもの、今まであったものを新しく変容させることである。「媒体」は、言葉、文書、イメージ映像などでまとめられるもので、発展する媒体によってコンテンツの領域を広げてくれる要素である。

文化コンテンツを開発するには創意的なアイデアが重要であるが、その源泉ソースは大体文学や歴史、哲学など人文学の分野から探られている。特にストーリーが豊富な古典文学から探している傾向がある。

古典文学と文化コンテンツの連携は、単純に古典文学を理解し、鑑賞するところで止ま

らず、それを現代的な観点から再創造し、新しいコンテンツとして作り上げることをいう。すなわち、古典文学本来の性質も生かしつつ、時代的要求に合わせて再構成するということがある。

ただし、コンテンツ化される古典は散文の方が多く、韻文は少ない。それはストーリーリング化されるのがむずかしいからであろう。

一般的にストーリーリング (storytelling) とは、ストーリー (story) とテリング (telling) の合成語であるが、単語、イメージ、音などを通じて事件を伝達することを言う。ストーリーまたは narrative はあらゆる文化圏でエンタテインメント (entertainment)、教育の手段、文化の保存及び道徳的価値を持ってきた。ストーリーリングには筋 (plot)、キャラクター、そして視点が含まれていなければならない。方法には新しい話を作る創作、既存の作品を現代的に変容する脚色、人気のある原作を各々の媒体に合わせて活用させ、ジャンルを変える転換などがある。⁸⁾

韓国では詩歌ながらも文化コンテンツ (ドラマ) 化された作品があるが、それが郷歌の「薯童謡」である。『三国遺事』に次のような記述がある。

第30代武王の名は璋である。母は寡婦になり。京の南の池邊に室を築いて住んでいた。池の竜と交わして璋を生んだ。子供の時の名は薯童である。才器と度量が測ることが難しかった。常に薯を掘ってそれを売って生活していた。国の人々はその為に薯童と名付けた。彼は新羅の真平王の第三公主善花が美しいと聞いて髪を剃って京へ行って薯を里の童たちに食べさせ、童たちと親しくなった。乃ち童謡を作って童たちに之を唱うように誘ったことが次のように伝わる。

善花公主 (王女) の君 そと嫁入りなされて 夜には 薯(マ)童(トン)さまを 抱きしめて立ち去る。

童謡が都中に広がって宮殿にまで聞こえた。百官たちが騒ぎ立てたために、遠い地方へ王女を島流しさせることになったが、出発のとき王后が純金一斗を与えた。王女が流されてゆく途中、薯童が立ち現れて挨拶をし、護衛していきたいと申し出た。王女はそのものの素性はわからないけれども、なんだか気に入ったので、ついてくるようにいった。そして二人が親しくなってから薯童という名前を知って、童謡がもつともであると言うようになった。⁹⁾

8) ユン・ジョンソン「古典文学と文化コンテンツ教育方法論研究」『批評文学』2010。

9) 第三十武王名璋。母寡居。築室於京師南池邊。池竜* <文{交}>通而生。小名薯童。器量難測。常掘薯蕷。売為活業。国人因以為名。聞新羅真平王第三公主善花[一作善化]美艷無双。剃髮來京師。以薯蕷餽閭里群童。群童親附之。乃作謡。誘群童而唱之云。「善花公主主隱他密只嫁良置古 薯童房乙 夜矣* <卯、卯>乙抱遣去如」童謡滿京。達於宮禁。百官極諫。竄流公主於遠方。將行。王后以純金一斗贈行。公主將至竄所。薯童出拜途中。將欲侍衛而行。公主雖不識其從來。偶爾信悅。因此隨行。潛通焉。然後知薯童名。乃信童謡之驗。

たったこれだけの記述を持って56部作の人気ドラマになった。また古典文学のコンテンツ化は他にも外国人のための教材としても開発されているが、ヌリ世宗学堂のコンテンツ化された教材が代表的である¹⁰⁾。他に韓国コンテンツ振興院にも数多くの資料がある。¹¹⁾

コンテンツ化されたテキストは、元の意味があせたり、重要なところがなくなってしまうのではないかという問題も生じる。しかし、今の時代では、古典文学はその国の人にも一次読みだけでは把握しにくい時間的、空間的文化的の壁がある。それは外国人学習者の場合、二重、三重の壁になることはいうまでもない。特に詩歌はその最たるものである。

共感 (sympathy) は、主に人間同士が (または人格が付与された創造的行為者が) 同類意識をもつことを意味する。すなわち、「ハムレット」を見ながら自分が感情的にハムレットになるのではなく、彼の悩みに同情し、可愛そうに思う第三者の感情が共感である。感情移入 (empathy) が結合させることであれば、共感 (sympathy) は並ばせることである。… (中略) 作品の伝達のためには両方とも必要であるが、感情移入 (empathy) の方に力点を置く作家は暗示性の強い言葉を選び、具体的で細密な描写に力を入れるだろうし、共感 (sympathy) に力点を置く作家は人間本然の性格を強調させようとするだろう。¹²⁾

この「共感 (sympathy)」によって残されている作品こそが時間と空間を越えて名作として残されている古典ではなかろうか。『創造された古典』(ハルオ・シラネ)『万葉集の発明』(品田悦一)などで述べられているように『万葉集』がアイデンティティーによって創造された古典でもあると思われるが、上に述べられているように多くの人の共感が得られれば、『万葉集』はまた再評価されるだろう。そのためにも『万葉集』関係の多くの文化コンテンツが開発される必要があると思われる。

3. 『万葉集』の理解のための文化コンテンツ化

『万葉集』とは日本が誇る国民歌集である、と普通に言われているが、これが近代において「発明」された観念であると品田悦一氏『万葉集の発明』(2001)にて論じられている。氏によると、明治23年前後の十数年間に、『万葉集』は上は天皇から下は名知らぬ人々に至るまで古代の国民の声を載せた歌集として見出され、国民の古典の最高峰

10) <http://www.sejonghakdang.org/opencourse/culture/webcomic>

11) <http://www.kocca.kr/cop/main.do>

12) イ・サンソップ『文学批評用語辞典』民音社、1976

に押し上げられた。以来、百年あまりにわたり、日本人のナショナル・アイデンティティーを支えるきわめて有効な「文化装置」として機能した、という。そしてその事例として、教育の場で、『万葉集』を国民の古典中の「至宝」とした文学史を教え、国語科目の教科書には、期待される国民像の結晶としての『万葉集』の歌が採られたことをあきらかにしている。

こういうところが日本の自国民にはどういうふうを受けとられるべきかは後の問題とし、それでも外国人には「日本」を特色付ける大きな「文化装置」であることは確かであろう。そのため、古典文学の中でも『源氏物語』と共にコンテンツ化されることが多い。

特に『万葉集』には日本的な要素は言うまでもなく、韓国人にも親密な要素も収録されている。それはまず、未知のこを受け取るに伴われる拒否感を和らげる役割を果たしてくれるだろう。

まず『万葉集』巻20、4401番歌から見ると

原文：可良己呂武 須宗爾等里都伎 奈苦古良乎 意伎弓曾伎怒也 意母奈之爾志弓

読み下し：韓衣 裾に取り付き 泣く子らを 置きてそ来ぬや 母なしにして

口語訳：韓衣の 裾に取りすがって 泣く子どもを 残して来た 母親もないのに

この歌は作者未詳であるが、巻20の「防人歌」の中の一首として「韓衣（からころむ）」や「母（おも）」などの韓国と関係のある歌語が含まれている。また1字1音読みの歌であるため、韓国人の学習者にも原文読みがある程度できる歌でもある。

防人も韓国と関係があるが、筑紫・沓岐・対馬などの北九州の防衛にあたった兵士たちのことである。664年、中大兄皇が防人と烽の制度をおいたが、これは前年の朝鮮半島での白村江の戦いの敗戦後、防衛のために考えられた。

防人には大体東国の人たちが選ばれた。東国には飛鳥時代から平安時代にかけて、朝廷の政策により、朝鮮半島から多数の渡来人・難民が東国方面に移住・入植した経緯がある。六国史を始めとする記録からは、これら半島出身者の東国への移住が数多い。その記録は以下のとおりである。

推古天皇9年(601年)、対馬に到った新羅の間諜迦摩多を捕えて貢上し、上野に流す。

齊明天皇6年(660年)、百済が唐俘100余人を献上する。今の美濃国不破郡・片栗郡の唐人等である。

天智天皇5年(666年)、百済人の男女2000人以上を東国に移住させる。凡そ緇素(出家者と非出家者)を扱はず。癸亥年より3年間、同様に官食を給賜する。

天武天皇13年(684年)、百済人の僧尼及び俗人の男女23人を武蔵国へ移す。

朱鳥元年（686年）、新羅沙門行心が謀反し、飛驒国の伽藍に徙す。

持統天皇元年（687年）、投化した高麗56人を、常陸国に居住させ、投化した新羅人14人を下野国に配する。又、新羅の僧侶及び百姓の男女22人を武蔵国に移住させる。いずれも土地と食料を給付し、生活が出来るようにする。

持統天皇2年（688年）、百済の敬須徳那利を甲斐国に移す。

持統天皇3年（689年）、投化した新羅人を、下毛野に居住させる。

持統天皇4年（690年）、帰化した新羅の韓奈末許満等12人を武蔵国に居住させる。又、帰化した新羅人等を、下毛野国に居住させる。

霊亀元年（715年）、尾張国人の席田君近及び新羅人74家が美濃国を本貫地とし、席田郡を建てて。

霊亀2年（716年）、駿河・甲斐・相模・上総・下総・常陸・下野七カ国の高麗人1799人を武蔵国に移し、始めて高麗郡を立てる。

天平5年（733年）、武蔵国埼玉郡の新羅人徳師等の男女53人に請われ、金姓とする。

天平宝字2年（758年）、日本に帰化した新羅の僧32人、尼2人、男19人、女21人を武蔵国の閑地に移住させ、はじめて新羅郡を置く。

天平宝字二年（758年）、美濃国席田郡の子人・吾志等、賀羅造を賜姓される。

天平宝字4年（760年）、帰化した新羅人131人を武蔵国に置く。

天平宝字五年（761年）、新羅征討に備え、美濃・武蔵各国の少年20人ずつに、新羅語を習わせる。

天平神護2年（766年）、上野国の新羅人子午足ら193人が吉井連を賜姓される。

宝亀十一年（780年）、武蔵国新羅郡人の沙良・真熊等2人が広岡造を賜姓される。

延暦七年（788年）、美濃国厚見郡人の羿鹵浜倉が美見造を賜姓される。

延暦8年（789年）、信濃国筑摩郡人の後部牛養が田河造を賜姓される。

延暦16年（797年）、信濃国人の前部綱麻呂が安坂姓を下賜される。

延暦18年（799年）、百済姓の甲斐国人190人、高麗姓の信濃国人12人等、朝廷に願い出て日本姓を下賜される。

弘仁5年（814年）、化来した新羅人加羅布古伊等6人を美濃国に配す。

弘仁11年（820年）、遠江国・駿河国に配された新羅人700人が反逆する。（弘仁新羅の乱）

天長元年（824年）、新羅人辛良金貴、賀良水白等54人を陸奥国に安置する。法により復を給し、乗田を口分田に充てる。

貞観12年（870年）、新羅人20人の内、清倍、鳥昌、南卷、安長、全連の5人を武蔵国に、僧香嵩、沙弥伝僧、関解、元昌、卷才の5人を上総国に、潤清、果才、甘参、長焉、才長、真平、長清、大存、倍陳、連哀の10人を陸奥国に配する。

任期は3年で、毎年2月に兵員の三分の一が交替となった。東国から行くときは部領使が連れて行くが、徒歩、裕福な人は馬で北九州まで行くわけだった。ただし、帰りは自費であったため、旅費のない兵士は帰りたくても帰ることができなかった。また、無理して帰路についても、故郷の家を見ることなく、途中で行き倒れとなる人々もいた。それで防人になることを恐れ、悲しむことは当然のことだったので、あのような歌が歌われたのである。

「韓衣」は万葉の枕詞として「裾」「着る」「裁つ」にかかる。特徴はその裾と袖にあったらしい。『万葉集』で「すそ」は「裳」「玉裳」「赤裳」「ぬれる」という表現と一緒に読まれている。韓半島南部の服飾の特徴として、「すそ」とか「裳」の飾りとして「玉」を好んで使ったという記録もある。なにしろ「韓」という言葉が韓半島の「三韓」や「加羅」からの言葉という説がほぼ定説になっているため、韓国と関係深い言葉であることが分かる。

「母（おも）」は母親の意味。『万葉集』でわずかしか見えない。

旅行きに 行くと知らずて 母父（おもし）に 言申さずて 今ぞ悔しけ 4376番歌
我が門の 五本柳 いつもいつも 母（おも）が恋すす 業りましつも 4386番歌

4376番歌も、4386番歌も防人歌で、「母（おも）」は韓国語の「엄마」「어머니」という言葉と似ていることが分かる。『万葉集』では、部分的に韓国語と同源の言語が歌語として使われる例、例えばオモ〔母〕、ワタ〔海〕、ソデ〔袖〕等が見えるが¹³⁾他にもいろいろある。他の歌語に関しては後の課題とする。

また『万葉集』には歌に「題詞」、「左注」などが付いている。この「題詞」と「左注」の分析には歴史的事実が必要である。『万葉集』の歴史的事実の重要性に関しては崔光準氏によっても強調されているが、¹⁴⁾この歴史的事実には個人的な感性が合わせられた『万葉集』は詩歌ながらもストーリーリング化ができるのではないと思われる。

巻9の1740番歌を見ると

水江の浦島子を詠む一首<并せて短歌>

春の日の 霞める時に 住吉の 岸に出で居て 釣舟の とをらふ見れば 古の
事そ思ほゆる 水江の 浦島子が 鰹釣り 鯛釣り誇り 七日まで 家にも来ずて 海
界を 過ぎて漕ぎ行くに 海神の 神の娘子に たまさかに い漕ぎ向かひ 相とぶらひ
言成りかば かき結び 常世に至り 海神の 神の宮の 内の重の 妙なる殿に 携
はり 二人入り居て 老いもせず 死にもせずして 永き世に ありけるものを 世間の
愚人の 我妹子に 告りて語らく しましくは 家に帰りて 父母に 事も語らひ 明日の

13) 朴一昊「万葉集は韓国語（朝鮮語）で読めるか」（『国文学』四十一巻六号）p.143

14) 崔光準、「『万葉集』と古代東アジア」日本大学精神文化研究所紀要、2007. 3

ごと 我は来なむと 言ひければ 妹が言へらく 常世辺に また帰り来て 今のごと
逢はむとならば このくしげ 開くなゆめと そこらくに 堅めしことを 住吉に 帰り来りて
家見れど 家も見かねて 里見れど 里も見かねて 怪しみと そこに思はく 家ゆ出で
て 三年の間に 垣もなく 家失せめやと この箱を 開きて見れば もとのごと 家はあ
らむと 玉くしげ 少し開くに 白雲の 箱より出でて 常世辺に たなびきぬれば 立ち
走り 叫び袖振り 臥いまろび 足ずりしつつ たちまちに 心消失せぬ 若かりし 肌も
しわみぬ 黒かりし 髪も白けぬ ゆなゆなは 息さへ絶えて 後つひに 命死にける
水江の 浦島子が 家所見ゆ

反歌

常世辺に 住むべきものを 剣大刀 己が心から おそやこの君

口語訳

春の日が霞んでいる時に、住吉の岸に出て腰をおろし、釣り船が波に見え隠れするのを見ていると、昔の事が思われてくる。-水江の浦島の子が、堅魚を釣り、鯛を釣り心勇んで七日の間も家に帰って来ず、海の境も通り過ぎて漕いで行くと、海の神の少女に、思いがけず漕ぎ合い、求婚しあってことは成就したので、契りかわして常世に至り、海神の宮の中の幾重にもかこまれた立派な宮殿に、手を携えて二人で入り、老いることも死ぬこともなく、永遠に生きることとなった。ところが、この世の中の愚か者である浦島が、妻に告げているには「しばらく家に帰って父母ことを話すから。明日にでも、僕は帰ってくるよ」というと、姫は言う。「常世の国に帰ってきて、今のように、わたしに会いたいのなら、この玉手箱を、ゆめにも開けないで」と。しっかりと、堅く約束をした。住江に、帰ってきた浦島は家を探すが、家はない。里を探しても、里もない。「どうもおかしい」と、こう考えた。家を出て、3年の間に、垣根はおろか、家までも失せたのか。この玉手箱を開けてみれば、もとのように、家が現れるか。玉櫛笥を少し開ければ、白雲の立ち上って、海の果ての常世の国に、たなびいていった。浦島は立ち走り、叫んでは袖を振り回した。転げ回り、身をもがきじだんだを踏む。浦島は急に、失神してしまった。若い肌はしわだらけに、黒髪は白髪に。そして、息は絶え絶えに。ついに絶命してしまったという。-水江の、浦島の若者の自宅の跡が、見えるのだ。

反歌

永遠の世に住むはずえあったものを、他でもない剣刀-そなたの心によって空しくなってしまう。愚かなことよ。この君は

これは題詞が「詠水江浦嶋子一首<并短歌>」とあり、左注に「右件歌者高橋連虫麻呂歌集中出」と書いてあるため、『高橋虫麻呂歌集』に収録されていた「浦島太

郎」としてよく知られている日本の伝説を詠んだ歌であることが分かる。この歌の内容は『日本書紀』雄略天皇二十二年条（478年）に「廿二年春正月己酉朔、以白髮皇子為皇太子。秋七月、丹波国余社郡管川人・瑞江浦嶋子、乘舟而釣、遂得大亀、便化為女。於是、浦嶋子感以為婦、相逐入海、到蓬萊山、歷觀仙衆。語在別卷。」と記述があり、『丹後国風土記』和銅6年（713年）「筒川島子 水江浦島子」という項目にも記述がある。それが室町時代の御伽草子「浦島太郎」として現在伝わる話の型が定まった。

韓国の濟州島の竜宮伝説にもこの話と似たような話がある。

あるところに樵が住んでいたが、ある日、子供たちが釣った亀を自分も者だと争っているところを見て、その亀を買って海に帰してくれた。その日の夜、夢に亀と老人が現れ海辺に出るようにと言われ、出て行ってみたら亀が樵を背に乗せて竜宮に行く。樵が救ってくれた亀は竜王の娘だった。そこで3年間住み、家に帰ると言ったらお金と天女をくださったので一緒に帰ってきて幸せに暮らした。¹⁵⁾

大体の筋 (plot) が同じであることが分かる。この『万葉集』の歌と韓国の伝説との比較によって学習者たちは興味を持ち、歌を詠むことができるだろう。

「七夕」に関する歌もある。『万葉集』の中には約130首あまりの「七夕」関係の歌があるが、整理すれば次のとおりである。

卷8の1518番歌～1546番歌

卷9の1686、1764、1765番歌

卷10の1996番歌～2093番歌

卷13の3264、3299番歌

卷15の3611番歌、3656番歌～3658番歌

卷17の3900番歌

卷18の4125番歌～4127番歌

卷19の4163番歌

卷20の4306番歌～4313番歌

この歌の中で上で述べた「浦島太郎」の伝説を歌った1740番歌と同じく、「七夕」の伝説を原型とおりに歌っているのが次の卷8の1520番歌である。

15) 韓国コンテンツ振興院

http://www.culturecontent.com/content/contentView.do?search_div=CP_THE&search_div_id=CP_THE004&cp_code=cp0201&index_id=cp02010144&content_id=cp020101440001&search_left_menu=

彦星は 織女と 天地の 分れし時ゆ いなむしろ 川に向き立ち 思ふそら 安け
なくに 嘆くそら 安けなくに 青波に 望みは絶えぬ 白雲に 涙は尽きぬ かくのみや
息づき居らむ かくのみや 恋ひつつあらむ さ丹塗りの 小舟もがも 玉巻きの ま懼も
がも <一に云ふ「小棹もがも」> 朝なぎに いかき渡り 夕潮に <一に云ふ「夕に
も」> い漕ぎ渡り ひさかたの 天の川原に 天飛ぶや 領巾片敷き ま玉手の 玉
手さし交へ あまた夜も 寝ねてしかも <一に云ふ「眠もさ寝てしか」> 秋にあらずとも
<一に云ふ「秋待たずとも」>

口語訳

牽牛と織女と、天地の別れた時からずっと 河に向い立って慕いあう身も安からず、嘆く身も安からずに、川に立つ青浪によって希望は絶たれて来た。横たわる白雲を望んで涙も乾かなかった。こうしてばかり溜息をついているのだろうか。このようにただ恋焦がれているのだろうか。赤く塗った小船も欲しい。立派に皮を巻き飾った懼も欲しい(一云く、小さな棹も欲しい)。朝の風に懼をかいて渡り、夕べの潮流に(一云く、夕べにも)船に帆を揚げて渡り、久方の天の川の河原に、天を翔けると云う領巾を半ば敷いて、真玉のような美しい腕をさし交わし、幾夜も寝たいものだ(一云く、寝ることもしたいものだ)。秋ではなくとも(一云く、秋を待たずとも)。

この歌は山上憶良の七夕歌の中の1首で、大体の筋 (plot) は韓国の「七夕」と同じであるが、韓国ではカササギと鳥が作ってくれた「鳥作橋」を渡って会うのに対して、日本は船で天の川を渡って会うことになっている。

本来「七夕」は中国から韓国と日本に伝えられた行事で、織女と牽牛の伝説は『文選』の中の漢の時代に編纂された「古詩十九首」¹⁶⁾が文献として初出とされているが、まだ7月7日との関わりは明らかではない。その後、南北朝時代の『荊楚歳時記』¹⁷⁾には7月7日の夜が牽牛と織姫が会合する夜であると明記され、さらに夜に婦人たちが7本の針の穴に美しい彩りの糸を通し、捧げ物を庭に並べて針仕事の上達を祈ったと載せられていて、7月7日に行われた乞巧奠と織女・牽牛伝説との関わりがはっきりと分かる。また六朝・梁代の殷芸が著した『小説』には「天河之東有織女 天帝之女也 年年机杼劳役 織成云錦天衣 天帝怜其独处 許嫁河西牽牛郎 嫁後遂廢織紉 天帝怒 責令歸河東 許一年一度相会」¹⁸⁾という一節があり、これが現在知られている七夕のストーリーとほぼ同じ

16) 古詩十九首之十、迢迢牽牛星 (無名氏)

17) Jing-chu-sui-shi-ji; Ching-ch'u-sui-shih-chi

中国の揚子江中流域地方を中心とした年中行事記。6世紀、梁の宗懐撰。当時の庶民の信仰、習俗などがわかる。7世紀の初め頃、隋の杜公胆が改編増補し、注をつけた。

18) 天の河の東に織女有り、天帝の子なり。年々に機を動かす労役につき、雲錦の天衣を織り、容貌を

型となっている。

日本の伝説の中には「烏作橋」と「雨」に関する言及はないが『万葉集』の「七夕歌」にはまた次のように韓国の伝説と似た構造を歌った歌が見られる。

この夕 降り来る雨は 彦星の はや漕ぐ舟の 櫂の散りかも	2052番歌
高麗錦 紐解きかはし 天人の 妻問ふ宵ぞ 我れも偲はむ	2090番歌
秋されば 霧立ちわたる 天の川 石並置かば 継ぎて見むかも	4310番歌

この三首ともに作者未詳で、左注もなく、ただ「七夕歌」に分類されている。2052番歌には「雨が降る」という表現があり、2090番歌には「高麗錦」、4310番歌には「天の川に飛び石をおいて橋を作っておけば」という表現があつて、韓国との関係を考えてみる事ができる。

『万葉集』には韓国の「ユンノリ」に基づく表記もあるという研究もある。

たとえば、韓国にユンノリと呼ばれる遊びがあるが、『万葉集』にはそれに基づく表記も見られる(1874番歌「半島から渡来した遊戯」参照)。

春霞たなびく今日の夕月夜清く照らむ 高松の野に (卷十・1874)

という歌だが、3句目の「夕月夜」の原文は「暮三伏一向夜」とされている。実は、この「三伏一向」が、ユンノリと関係のある表記なのだ。サイコロの代わりに用いる4本の棒は、半月状に割られているので、投げると、それぞれが表か裏になる。「三伏一向」は、3本が裏で、1本が表になった状態のことである。

同様の表記は、これ1つだけではない。「末の中ごろ(末中一伏三起)」(卷十一・2988)、「ねもころごろに(根毛一伏三向凝呂爾)」(卷十三・3284)は逆に、1本が裏で、3本が表を向いた状態。それをコルと言うので「ころ」にあてたのだ。また、全部裏返った「諸伏」(卷四・743)という表記もある。こうした遊びは、中国で生まれたものと言われるが、日本には朝鮮半島経由でもたらされたものだと考えられている。¹⁹⁾

最近、韓国国内でも色褪せていく伝統遊び「ユンノリ」を、日本の古典詩歌から再照明することができる。

他にも『万葉集』の中には韓国と関係のある様々な歌があり、また「菟原処女」「勝鹿の真間娘子」「大和三山」「桜児伝説」「蔓児伝説」「松浦佐用姫」など「水

整える暇なし。天帝その独居を憐れみて、河西の牽牛郎に嫁すことを許す。嫁してのち機織りを廃すれば、天帝怒りて、河東に帰る命をくだし、一年一度会うことを許す。『月令広義』七月令にある逸文。
19) 梶川信行, 崔光準編『マンヨウハセヨ! = 만요 하세요!』東京: 日本大学文理学部梶川研究室, 2009.2 p.12-28

江の浦の島子」のようにストーリー・テリング化ができる、日本固有の文化教育のための素材で満ちている。問題はそれらをどのようにストーリー・テリング化、コンテンツ化させるのかである。

5. 終わりに

文化教育とは、教育史にはまだ馴染のない用語であるが、主に1990年代以後、既存の知識伝達中心の偏向的な教育に対する批判的対案としてあらわれた。特定学問や教科に限らず、教育内容の開放性や学習者の能動的参加を骨子に、文化の諸現象に関心を見せる文化教育の波及力は現在極めて大きい。

日本の和歌は日本的な感性を持っている、日本的な文化産物であるということで、文化教育から外せないと思われる。では、その和歌という文化を韓国の学習者たちにどういふふうに伝えれば良いのか。日本的な要素は言うまでもなく、韓国人にも親密な要素も収録されている『万葉集』はもっとも適したテキストだと思われる。そのためには原典を生かしつつも大衆的な共感ができる文化コンテンツ物が開発されなければならないだろう。即ち、研究者はマルチメディアに関する知識や経験を積んでいかなければならないし、コンテンツの開発者には学問的、文化的理解の深化が必要である。

文学の「読み」の問題はもう「テキスト：教科書」という媒体の「文字」だけで読んで理解する時代ではなくなった。特に古典文学では「テキスト：原文」自体が難しいため、学習者は興味を失いつつある。学習者自ら手軽く、近づけることのできる古典文学のコンテンツ化が必要な時点になったと思われる。

【参考文献】

- クォン・ジョンウン、「文化教育と古典詩歌の脈絡的情報」79号、『新国語教育』
朴一昊「万葉集は韓国語（朝鮮語）で読めるか」41巻6号『国文学』
オ・セウォン（2003）「韓国高等学校の教科書に反映された日本文化教育の現況」全南大
学教育大学院修士学位論文
オ・ヨンスク（2005）韓・日古典文学教育の比較研究、順天大学教育大学院修士学位論
文、
イ・グンピョ（2003）「中国の韓国語教育と我らの外国語教育」巻2、『教育マダン』
イ・サンソップ（1976）『文学批評用語辞典』民音社
ユン・ジョンソン（2010）「古典文学と文化コンテンツ教育方法論研究」『批評文学』
崔光準（2007）「『万葉集』と古代東アジア」、日本大学精神文化研究所紀要
梶川信行，崔光準編『マンヨウハセヨ! = 만요 하세요!』東京：日本大学文理学部梶川
研究室，2009.2 p.12-28
鈴木二千六（1994）『古典教育の史的展開』

투 고 일 : 2015. 8. 31
심 사 일 : 2015. 9. 12
계 재 확정일 : 2015.10. 3